



保育者養成課程における素話実践の意義と課題

はじめに

保育の現場では、絵本の読み聞かせや紙芝居をはじめ、ペープサートやパネルシアター等、さまざまな児童文化財を用いた実践が行われている。保育者養成課程で学ぶ学生も、実習やボランティア等での実践に向けて、各自のレポートリーを増やしていく。しかしながら、素話¹⁾に関しては、他の児童文化財と比べて、現場ではあまり実施されていない現状が報告されている。

鈴木ほか(2006:68)は、保育職に就いている卒業生に質問紙調査を実施しているが、絵本の読み聞かせに比べて、素話に関する設問への回答数自体が少なく、実施が敬遠されがちである実情を示していると指摘している。同様に、現職保育者への質問紙調査を実施した小山(2012:34)では、素話の実施率の低さが指摘されているが、「時間があればやってみたい」との前向きな回答が多かった一方、「やり方がわからない」や「自信がない」といった、素話を実施しない理由も示されている。保育者養成課程で学ぶ学生は、他学科で学ぶ学生に比べて、素話について知っている割合が高い(佐藤2017:28)との報告もあるが、授業等で取り上げられることがない場合、その理解は表面的なものに留まってしまい、現場での実践につながらない可能性がある。

素話は、語り手の声を手がかりに物語を想像し、音の響きから自由なイメージを発想する力を培うことが可能になるといわれている。これらの力は、子どもたちの言葉の発達にも深く関係している。そのため、素話についての理解を深め、実践する力を身につけることは、保育者として必要であり、養成課程の中でも取り扱っていくことが望ましいと考える。

素話とは

素話とは、「物語を覚えて子どもたちに語ることをいう。視聴覚教材などを一切用いず、人の声のみで語る」(石井2015:391)ものである。「語り手が、主に声によって表現し、それを聞き手ともどもたのしむ」文学ともいわれている(松岡2017:25)。

松岡(2017)は、お話が子どもの中に育てる力として以下6点を挙げる(pp.77-78)。

- 一、想像力を育てる
- 一、考える力(ものごとの核心に注意を集中し、それを持続して、ひとつのことを追求する力)を育てる
- 一、聞き手と語り手、あるいは聞き手同士の人間関係を育てる(そぼくな、人と人とのコミュニケーションのよさを体得させる)
- 一、ことばの力(語彙、語感)を育てる
- 一、お話をたのしむ力を育てる
- 一、字の読めない子にも文学をたのしむことを可能にする

そして、「お話が子どもに働きかけて、子どもの中に育てる力は、どれひとつをとってみても、読書能力につながるもの」なく、「耳からの読書の経験」が、「目からの読書による読書生活への「素地をつくる」(p.79-80)と述べている。松居(1978)もまた、「幼児期は耳の時代である。耳から、人間らしい豊かな心のこもった言葉を、どのくらい聞くことができるかが、幼児期の言語教育、言語体験にいちばん大切である」(p.3)と、耳で聞く経験の大切さを指摘している。

想像力やことばの力を育むために、耳で聞く経験を充実させることが求められるが、テレビやスマホ等の情報機器の普及により、子どもたちは現在、耳以上に目を使い、動画等の映像を視聴する機会が増えている。学生が素話をする(お話を語る)力を身につけることは、保育施設において子どもたちの耳で聞く場面や機会を保障して

いくための一助にもなるのではないかと考える。

本稿では、学生が素話実践に取り組んだ授業を振り返り、実践の過程でみえてきた課題を整理し、保育者養成課程において素話実践を行うことの意義を考察してみたい。

2.

素話実践の流れ

素話実践で学生は、(1) お話を選ぶ、(2) 原稿を作成する、(3) お話を覚える、(4) 素話をする(発表)、(5) 振り返りを行う、の過程を体験する。以下に各段階の内容を説明する。

(1) お話を選ぶ

学生はまず、自身が語るお話を選ぶ必要がある。授業で提示した条件は、①「日本の昔話」から選ぶこと、②3分程度で語れる内容にすること²⁾の2点であった。

(2) 原稿を作成する

お話を選択した後、3分間になるように、素話原稿を作成する。学生は実際に声に出して語ることを通して、大筋を変えない範囲内で、言いまわしを変えたり、文章を短くしたり、接続詞を足したりする作業を行う。

(3) お話を覚える

原稿を作成したら、お話を覚える作業に入る。学生は、覚える作業の四つの段階(松岡2018:22)を参考に、発表に向けて準備を進める。

- 一、全体を声に出して読む
- 二、話の骨組を頭にいれる
- 三、話を絵にする(場面ごとに)
- 四、仕上げをする(全体をととして)

(4) 素話をする(発表)

発表当日は、クラスメイトが司会、タイムキープ、コメント係を分担している。発表者は自分の番になると、司会の進行に沿って前に出て、クラスメイトを3歳の子

どもに見立てて発表を開始する。3分経過後、コメント係から発表に対するコメントをもらう。

(5) 振り返りを行う

全体の発表が終わると、①実際に素話をしてみてどうだったか、自分の発表に対する振り返りを行う。また、②クラスメイトの発表を聞いて感じたこと、考えたことをまとめ、①も踏まえ、今後の課題を整理する。

素話実践における評価は、提出物(素話原稿と振り返りシート)及び発表とに分けて行っている。発表をより良いものにするためには、発表に至るまでの事前準備や事後の振り返りを丁寧に行うことが大切であることから、(1)から(5)の過程をすべて含めて素話実践であることを認識してもらうように心がけている。

3.

素話実践から見えてきた課題

2.に示したとおり、(1)から(5)の素話実践を進めていったが、各過程においては、計画の段階では想定していなかった課題も見えてきた。ここでは各段階において見られた課題を、素話実践に関連する先行研究も参考に整理していく。

(1) お話を選ぶ

授業では、「日本の昔話」からお話を選ぶことを条件にしていたが、まず、選んだお話が「日本の昔話」でなかったため、再度選び直しとなった学生が複数いた。水野ら(2021)によると、家庭における童話や昔話の絵本所有率は1990年から減少傾向が続いており、2020年には、所有率が40%を超える絵本は0冊となっている。水野らも指摘するように、図書館や電子絵本を活用することで、家庭での所有率が減ったとしても、童話や昔話に触れる機会は多様化していると言えるかもしれない。しかし、それらに積極的にアクセスしない場合、以前であれば、誰もが知っていると言われてきた童話や昔話でさえも、読み継がれていかないことになるのかもしれない。

もう一つの課題として、インターネットを利用し、

ネット上の動画を参考にしたり、ダウンロード可能なお話を使用したりする傾向の高さが挙げられる。これは次の(2)原稿を作成する段階とも関連しているため、(2)で説明する。

(2) 原稿を作成する

学生は大学入学時から、レポートや論文を書く際の注意点を学んできている。本授業でも、自分が語るお話の内容がどこにあるのか(どの本から引用したお話なのか)を必ず明記することを求めている。

インターネット上に掲載されている昔話の中には、お話が大幅に簡略化されているものや、セリフが現代風に書き換えられているもの等があり、素話実践で扱うお話として適しているとは言い難い。東京子ども図書館が編集、出版している『おはなしのろうそく』シリーズや昔話絵本等を参考にしている学生は問題ないが、インターネット検索でお話を選択しようとする学生は、そもそも引用元が匿名だったり、曖昧であったりすることから、再度、(1)お話を選ぶことからやり直すことになる者もいた。

同様の課題は、花房(2021:29)でも指摘されている。お話を選ぶ際、素話に相応しい本から選ぶことを伝えていたが、インターネット検索から選んだり、簡略化されたお話を抵抗なく選択したりする学生の姿があったという。

(3) お話を覚える

松岡(2018:16-18)は、「おぼえる」は、丸暗記ではありません」と述べている。その理由として、暗記と聞いただけで、いやなもの、やりたくないものという気持ちがわいてきてしまうことや、語っている途中で言い間違いをすると、その後が出てこず、話が続けられないということになる危険があることを指摘している。

本実践で学生に「素話実践で難しかったと感じたのはどんなところか」を尋ねたところ、「覚えること」や「話の続きを忘れてしまった際の対応」が挙がった。コメントには、「お話を一字一句間違えないようにする」や「完璧に覚える」等の表現もあり、先に示した、覚える作業の四つの段階(松岡2018:22)の説明をより丁寧に行う必要があることが分かった。

田中(2019)では、お話を自分のものとして語っていた学生のお話の覚え方が紹介されているが、言葉を暗記するのではなく、「ストーリーを覚える」ということをしていることで、途中で間違えることがあっても最後まで続けて語ることができていた(p.57)のではないかと考察している。

(4) 素話をする(発表)

「素話実践で難しかったと感じたのはどんなところか」を尋ねたところ、回答の多くが発表に関するものであったが、その中でも「緊張せずに人前に立ち、落ち着いて話すこと」と「目線」を指摘した学生が多かった。

花房(2021:25)では、「しっかりと練習を重ね、お話の面白さを十分に伝えられる学生もいれば、練習不足や準備不足、また友達の前で発表することの照れからうまく表現できない学生の姿」が、田中(2019:58)でも、緊張により、お話を忘れてしまったり、子ども(学生)の顔が見られなかったという学生のコメントが紹介されている。

本実践でも、タイトルをいうまではニコニコと笑顔で話し始めた学生が、次の瞬間から言葉が出ず、3分間語るができずにいた学生や、途中から笑いが止まらず、最後までお話の世界に戻れなかった学生、お話自体は最後まで滞りなく語れていたが、始終足元の一点を見つめ、子ども役のクラスメイトの方を一度も見ることができなかった学生等、さまざまな姿があった。学生の姿やコメントから、発表においては、まず1人でクラスメイトの前に立つことに最初の難しさが、クラスメイトの方に視線を向けることに次の難しさがあり、そこに素話をするものの難しさが重なり、学生自身も予想していなかった展開になってしまったのだと考えられる。

(5) 振り返りを行う

素話を行った(発表)後、学生は振り返りシートを用いて、自身の発表とクラスメイトの発表について、今後の課題を整理するが、その課題に基づいた「次の実践」は行われていないのが現状である。素話の発表では、事前の準備や取り組みの結果が大きく反映されることは勿論だが、それまでの経験の積み重ねによる影響も考えられるだろう。そのため、学生の力を高めていくためには、単

発の課題として終えるのではなく、継続課題として取り組んでいくことが必要である。

授業で素話実践を行った花房(2021:25)は、演習科目における実践体験を学生が実習で活用できているかを調査している。その結果、絵本の読み聞かせや、わらべうた等に比べて、素話を実施した学生は、教育実習、保育所実習で4.3%(4名)、施設実習で8.7%(8名)と、いずれも少数であることが分かったという。授業担当者としては、学内での学びを実習で活用してほしいとの願いがあるが、実習等で自信を持って実践するためには、学内での一度の経験では不十分なだろう。実習だけではなく、卒業後に保育現場で実践できる力をつけるためには、科目間連携等を通して、複数回、実践の機会を持つことも検討すべきだろう。

4.

素話実践の意義—今後に向けて—

3.では、素話実践から見えてきた課題を取り上げたが、別の側面から見るとそれらは、素話実践の意義とも捉えることができるものがある。以下に3点を挙げる。

(1) 素話に対する理解を深める

授業で素話実践を扱うことにした当初、学生は素話に対するイメージが湧きづらく、絵本の読み聞かせやシアター系の課題よりも、何をしたらいいか分からないという、不慣れな姿があった。素話実践の過程を経た今、学生により個人差はあるが、素話に対する全体の理解は、少なからず深まっているといえるだろう。

浅井ら(2019:129)は、先行研究から学生が素話を難しいと感じていることは明らかであるが、具体的にどのようなことを難しいと感じているのかを明らかにするために、紙芝居との比較分析を行っている。その結果、「絵のような視覚的なサポートがないため物語の展開や進行についていくことが難しく、物語を理解しにくいと感じていることがわかった」という。そこから、「素話の魅力であるイメージしたり想像したりする楽しさを味わいつつ、その難しさを乗り越えるような指導をする」こと

や、「素話を通じた先入観や前提の問い直しとしての授業」のあり方を提案している。

素話に対しては、他の児童文化財よりも見聞きしたり、実践したりする機会が少ないことによる不慣れさが、難しいという認識につながっていると考えられるため、実践を継続することで素話理解を深めることにつながり、難しさの感じ方も変化していくと推察できる。

(2) 昔話に触れる

お話を選ぶ過程で、複数の学生が昔話を選ぶことができなかつたと指摘した。昔話を題材にすることは、これまで昔話に触れてこなかった学生にとっては、新たに昔話に出会う機会になると考える。また、クラスメイトの選んだ複数の昔話を聞く発表の場も、複数の昔話に触れる機会となるといえる。

(3) 人前での実践に慣れる、他者の実践に触れる

発表においてはまず、素話に対する苦手意識を軽減させたり、お話をすることに対する緊張に慣れていく場を用意することが大切だと考えられるが、発表では多くの難しさが同時に存在することも事実である。そのためにはじめの段階においては、道具を使わないことにこだわらず、人前で話をするに慣れることを目指すために、最小限の道具を使つての実践から始めることも検討しても良いのではないかと考える。

そして、素話の実践を現在よりもさらに段階を経て継続して行うことで、人前での実践に次第に慣れ、同時に、他者の実践に触れることにより、素話に魅力を感じるようになっていたり、さらに自身の実践を振り返るきっかけになるのではないかと考える。

おわりに

本稿では、学生が素話実践に取り組んだ授業を振り返り、実践の過程でみえてきた課題を関連する先行研究も参考に整理し、保育者養成課程において素話実践を行うことの意義と今後に向けた新たな課題について考察

した。

(1) お話を選ぶ、(2) 原稿を作成する、(3) お話を覚える、(4) 素話をする(発表)、(5) 振り返りを行う、という素話実践の各段階における課題が整理されたが、それらは実践を行うことにより改善されていく可能性があることから、視点を変えると、実践することの意義として捉えることもできる。

学生だけではなく、保育現場における素話離れの現状が指摘されているが、養成課程において素話実践を体験することが、現場の取り組みを変化させるきっかけになることを期待し、今後も継続して取り組んでいきたいと考える。

註

- 1) 本稿では、素話、お話、ストーリーテリングを厳密に区別せずに使用している。
- 2) 授業では、保育士試験を参考に素話の時間を3分程度と設定した。保育士試験の実技試験(言語に関する技術)では、3歳児クラスの子どもに3分間お話することを想定し、お話を選択し語ることが課題となっている。

引用文献

- 浅井拓久也・森下嘉昭(2019)「養成校学生にとっての素話の魅力と課題に関する研究—紙芝居との比較分析を通じて—」『山口芸術短期大学研究紀要』51、pp.123-131
- 石井光恵(2015)「素話story telling」森上史朗・柏女霊峰編『保育用語辞典[第8版]』ミネルヴァ書房、p.391
- 小山祥子(2012)「乳幼児の言葉の育ちに関する現状と課題(2) 一家庭と保育の場における「おはなし」の環境から—」『駒沢女子短期大学研究紀要』45、pp.31-38
- 佐藤浩代(2017)「保育内容「ことば」における素話実践演習の意義—教育要領、保育指針、教育・保育要領「改訂」を踏まえた授業展開の検討—」『東洋英和女学院大学教職課程年報』9、pp.22-34
- 鈴木正和・村中由紀子・三浦正雄・峰村康広(2006)「絵本の読み聞かせと素話についての調査と展望—a短期大学幼児教育学科卒業生に対する質問紙調査をもとにして2—」『山陽学園短期大学紀要』37、pp.57-73
- 田中麻紀子(2019)「「保育内容・言葉II」におけるストーリーテリングの実践」『神戸教育短期大学 教育実践研究紀要』1、pp.55-62

- 花房ナオミ(2021)「保育者養成課程における演習科目の意義—児童文化財伝達における保育スキルの向上を目指して—」『梅花女子大学心理こども学部紀要』11、pp.22-31
- 松居直(1978)『絵本をみる眼』日本エディターズスクール出版部
- 松岡享子(2017)『お話とは レクチャーブックスお話入門1』東京子ども図書館
- 松岡享子(2018)『おぼえること レクチャーブックスお話入門3』東京子ども図書館
- 水野智美・徳田克己(2021)「家庭における幼児の童話・昔話離れ現象の実態—1990年からの30年間の変化—」『実践人間学』12、pp.11-25